

『痴人の愛 谷崎潤一郎』

以前の「刺青」で、その不気味な世界に引き込まれたことがある谷崎作品。今日、読み終えたのは「痴人の愛」。「私は、これから私達について、正直にありのままを書きます」との一行から始まる。平凡なサラリーマン讓治の一人称が、この書き出しから、テンポよく流れ続け、全く退屈することなく一気読み。二八歳の讓治は、十五歳の美少女ナオミに出逢う。そこから彼女を、自分の理想の女性に仕立てようと決意。ピアノや英語教室に通わせながら、その成長を楽しみに見守る日々。数年後、さすオオミの変容ぶりは何に思百年前に書かれたのに、まるで現代の話に思える内容だった。人の心が、ままたらないのは、時代を向わず、常に似たようなものだといふ事かも。この小説は、大正時代の新聞連載だった。たといから驚いた。当時の読者は、さぞ度肝を抜かれたことだろう。今回私は、ブックス、シンヨ、ンヤ映画、ダンスホールなど、大正ハイカラな事を楽しんだ一冊とな

った。

・レビュー者名： ななつと  
 ・ぶん文 Bun ネーム(または匿名希望):  
 ・[ ] 枚目  
 ←WEBからのご応募はこちらどうぞ (https://forms.gle/Wy1KfN6Haxov1q1Y7)

20 × 20



椎葉村図書館

ぶん文 Bun

